

発話のくり返し、語りの重ね合い

— 三者面接調査における共感表出行動 —

熊谷智子・木谷直之

【キーワード】 共感・くり返し・参加の枠組み・三者面接調査

【要旨】

やりとりにおいて、相手や話題に対する共感 (involvement) を表出することは、雑談などの交話的な会話に限らず、面接調査のような場でも行われる。本稿では、他者の発話のくり返しや、他者の語りについて同様の語りを重ねるといった行動に着目しながら、調査者と回答者二人という互いに初対面の三者による面接調査談話における共感表出行動を分析する。

本稿で分析するデータには、二人の回答者が互いの発話や時には動作までをくり返し合いながら回答し、それを通して共感を表出している例、そして調査者が回答者の言ったことに触発されてそれをくり返すようなコメントをするという共感表出の例が見られた。これらは、言葉や言い回しのくり返し、言い換えによるくり返しなど、様々なレベルでのくり返しを数多く含んでいた。

その一方で、少し視点を変えるところしたやりとりは、同じ趣旨内容の語りをするという行為の重ね合いと見ることもできる。特に、回答者どうしのやりとりは活発な「相互的競合的私事語り」(串田 2006) と呼べるものであり、また調査者による語りの重ねは、相手の語りを聞いて共通する経験を探索し、述べるという「共・成員性 (co-membership)」に指向した行動と言える。そこにおいて、時には調査者が調査の枠組みによる典型的な行動から一歩踏み出て、共感の表出を優先している様子も見られた。

面接調査のように一定の参加の枠組みを持つ談話では、時には自由な共感の表出が制限される。しかしその一方で、そうした枠組みに照らすことによって共感表出のありようや強さをとらえられる場合もあることを指摘する。

1 はじめに

雑談などの交話的 (phatic) な会話においては、話者が話題となっていることがらへの関心や思い入れを示したり、話者どうしが意気投合して互いに相手との共感や一体感を表出したりすることが少なくない。一方、面接調査では調査者が回答者に一定の質問をして

答えを得るのが目的であり、相互の役割に基づく情報授受のためにやりとりが行われる。しかし、調査談話においても、話者による興味や共感の表出が様々な局面で観察されることがある。ただし、面接調査には、調査者と回答者という役割関係、そして質問と回答という相互行為パターンに代表される参加の枠組みが存在する。その参加の枠組みは、自由な形での共感表出を制限する面があるが、同時に枠組みの存在ゆえに話者の共感の強さが浮き彫りにされる場合もある。

本稿では、調査者1名と回答者2名による三者面接調査における話者行動を、発話をくり返す、語りを重ねる（あるいは重ね合う）ということに着目しながら分析する。そして、面接調査談話の参加の枠組みを通して明らかになる共感表出行動を指摘する。

以下、2節では本稿で共感と呼ぶもの、および談話におけるくり返しについて、先行研究の議論も参照しつつ述べる。3節で分析データの概要を示し、4節でその分析を、主に他者の発話のくり返しの観点から行う。そして5節で語りの重ね合いという視点もまじえて考察を行い、6節で今後の課題を述べる。

2 共感 (involvement) とくり返しについて

本稿で共感と呼ぶ概念は、Tannen (1984、1989)、Chafe (1985) で論じられている *involvement* とほぼ同じものである。Tannen (1989) は、*involvement* を以下のように述べている。

an internal, even emotional connection individuals feel which binds them to other people as well as to places, things, activities, ideas, memories and words (p.12)

(個人々が感じる、彼らを他の人々や場所、もの、活動、考え、記憶、言葉などと結びつけるような内的、情動的つながり：筆者訳)

本稿では、共感を「会話において話者が話に情情的に入り込んだり、相手と認識の共有や一体感を達成したりすること」と定義する。

Chafe (1985) は、*involvement* には話者自身の *involvement* (self-involvement)、聞き手との間での *involvement*、話されていることがらへの *involvement* の3種類があると述べている。本稿で言う共感にも、そうした諸側面が認められると考える。

Tannen (1984、1989) は、話者の *involvement* を表出したり、会話参加者相互の *involvement* を高めたりするための方策として、相手の発話へのオーバーラップ、発話の共同構築、矢継ぎ早の質問など様々な行動をあげているが、その一つに発話のくり返しがあるとしている。発話のくり返しとは、以下のように、自分や人の言った言葉をくり返すことである。

- (1) 「早く入って、入って」
(2) 「今日は寒いですねー」「ほんと、寒いねー」

(1)では、「入って」を一度だけ言うよりも二度言うことによって、話者の相手に強く働きかける勢い、あるいは積極的な姿勢が感じられる。(2)では、相手からの「寒いですねー」に対して「寒いねー」と受けているが、「そうですね」と答えるよりも同じ言葉をなぞることによって、思いを共有することがより強く表出されていると言える。

くり返しには、誰の言葉をくり返すかということのほかにも、形状やタイミングの面でもバリエーションがある。形状に関しては、まったく同じ形のままくり返すこともあれば、言葉を足したり省いたり、意味を保持したまま言葉を言い換えたり、あるいは要約したりという場合もある。タイミングの点では、もとの発話に続いてすぐくり返す場合も、あるいは以前になされた発話を時を隔ててくり返す場合もある。

本稿では、自分のものでなく他者の発話を、一つの面接調査の談話内でくり返している場合に分析対象を限ることとする。ただし、形としては、同じような内容を再び言っているものであれば、言い換えや要約などもくり返しとして考える。

中田（1992）は、会話における発話のくり返しの機能を以下のように分類している。

- 関説的 : 叙述や情報のやりとりのような伝達を助ける
- 心情的 : 話者の心情や態度を表現する
- 動能的 : 指示や説得、呼びかけなど、相手への働きかけに関わる
- 交話的 : やりとりによる接触関係を保つ
- 詩的 : 音やリズム、ことば遊びのような効果をあげる
- メタ言語的 : 言葉の意味を確認するなど、言語そのものについて言及する
- 談話構成的 : 談話の構造表示や運営に関わる

このようにくり返しにも様々なはたらきがあり、その一つが共感の表出と言える。上記の分類の中で共感の表出に特に関わりが深いのは心情的な機能だと考えられる。

3 データの概要

分析対象とするのは、半構造化面接調査の談話2件からの抜粋である。いずれにおいても、調査者と回答者2名の三者は同性（男性と女性の談話1件ずつ）で、回答者は同学年の大学生、そして三者は互いに初対面である。調査では、「携帯電話の使い方や自分にとっての位置づけ」と「日常の言葉の使い分け」をテーマとして調査者が質問し、回答者がそれに答えている。

4 分析

上述のように、面接調査には調査者が質問して回答者がそれに答えるという基本的な相互行為パターンがあるため、他者の発話のくり返しとしては、調査者と質問者の間で互いの発話のくり返すという場合が非常に多い。そしてその多くは、回答者が調査者の質問（の一部）をくり返して確認したり答えを考える間をつないだりする、調査者が回答者の回答内容を要約的にとりまとめて確認するといった、いわゆる客観的な情報授受のプロセスに関わるくり返しである。

そうした質疑の中でも、共感表出としては、例えば以下の2件のような事例が見られた。(3)では、回答者が服を買いに行った際に店員の対応が気にさわったという話をしている。文字化中、話者記号 I は調査者、それ以外（A～D、X～Z）は回答者である（注1）。

(3)

1194I : それは、同じ年、ぐらいの、//それ、

1195X : 違い、ますね。多分年上だと思うんですけど。

1196I : ふーん。

1197X : 一応、買いに来てるんですけど一、みたいな{笑い}

1198Y : //ふーん。

1199I : {笑い}

1200I : お客なんですけど一//って、

1201X : えーっていう、{笑い}

1197X で回答者 X が、丁寧さに欠ける店員の応対に対する困惑と抗議の気持ちを冗談めかして述べる。それを調査者 I が 1200I で言い換えてくり返し、さらにまた X が 1201X で言い換えてくり返しているが、ここでは X の発言のおもしろみに対する I の注目と共感が示され、両者が認識の共有を確かめ合っている様子が観察される。

(4)では、携帯電話を紛失したがすぐ見つかったという Z の話に、I がコメントしている。

(4)

376I : そうですか。でもすぐ見つかって、//よかった、ですね。

377Z : そうですね。見つかって、はい。よかったです
すねー。

調査者の「見つかって、よかった、ですね」というコメントに重ねながら、回答者は「そうですね」と応じるが、それに続けてさらに調査者と同じ言葉をくり返すことで、事なきを得たことへの安堵をあらためてかみしめ、分かち合う形になっている。

(3)や(4)で見るように、質問-回答のやりとりの細かなレベルにも話者の間での共感表出

は観察されるが、以下ではより顕著な形で、あるいは面接調査の役割行動にも影響を及ぼすような形で共感の表出が行われている事例を分析する。4・1では初対面の回答者間での共感表出、4・2では回答発話に触発されて調査者が行った共感表出の例を検討する。

4・1 初対面回答者間での共感の表出

面接調査における調査者と回答者間の質疑応答では、回答発話は調査者に向けて述べられ、その間もう一人の回答者は自分が回答する番が来るのをおとなしく待つという形になることが多い。特に、回答者が互いに初対面の場合、相手の回答中に脇の聞き手としてうなずいたり、笑ったり、場合によっては「あー」「ふーん」のような反応や相づちの声を発したりすることはあっても（木谷・熊谷 2007）、相手の発話をくり返すといったことはなかなか起こらない。

しかしながら、以下に見る女性ペア（A、B）の調査では、非常に盛んなくり返しが見られた場面があった。AとBは二人とも、これらの抜粋部分に限らず調査全体を通して、回答するときには調査者ともう一人の回答者に交互に視線や発話を向けながら三者の自由会話のような話し方をしており、自分の回答中に「～ですよ？」ともう一人に同意を求めたり、もう一人の回答中にコメントをはさんだりするなど、直接的なやりとりも多く見られた。以下の(5)(6)では、質問の話題が「携帯を忘れてたり、充電が切れたりしたとき、友達と貸し借りする場合に気になること」であった。こうしたことは、両者ともに日常的に経験しており、また述べたい内容もかなり似ていたようである。そのため、互いに相手の発話に上乘せし、同じような発話をくり返し合いながら活発に回答を述べている。

(5)

313B：なんか人に貸すと何やられてるんだろう//っていうのが、{笑い}

314A：　　そうそうそうそう、そうですよ//ね、

315B：　　あり

　　ま//すね。

316A：　　見ないでこうやってると、勝手に//メールとか、

317B：　　そう、

318A：見られてるんじゃないかなーとか思うんですよ//ねー。

319B：　　そう、

320I：　　あー。

321B：結構フォルダーとかの中//も、

322A：　　そうそうそうそうそう、

323B：なんかこわいです{笑いながら}よ//ね。

- 356A : なんか、メール勝手に見たりとかっていうのでなんか、友達の信頼関係薄れそうに
//なったりするんですよ。
- 357B : うんうん、
- 358I : うん。
- 359A : 「なに勝手に見てんの」みたいになると、
- 360I : うん、
- 361A : ねえ、
- 362B : {笑い}
- 363A : あれなので、
- 364I : あー、
- 365B : えフォルダーとかみ、あの画像のフォルダーとか見//て、すごい素で怒る人います
からね。{笑い}
- 366A : 　　　　　　　　　　　　　　　　そう、
- 367A : そう、そうなんですよ、//なんか、
- 368I : 　　　　　　　　　　　　　　　　あ、そう//ですかー。
- 369B : 　　　　　　　　　　　　　　　　「やめてよ！」みたい//な、{笑い}
- 370A : 　　　　　　　　　　　　　　　　見ても怒らない人も
いるけど、
- 371I : ふーん、
- 372A : 大抵の人はちょっとなんか、{手振り}「あ、//ちよちよちよちよ、何してんの」っ
て言う人いますよね。{笑い}
- 373B : 　　　　　　　　　　　　　　　　{手振り}「あ、ちよちよちよちよ、」{笑い}
- 374A : 「{手振り}ちょっとだめだよ、そこー、」みたいな、{笑い}のが多い、
- 375B : 「{手振り}ちよちよちよ、ちよつと待つて」みたい//な、{笑い}
- 376A : 　　　　　　　　　　　　　　　　そうそう、{笑い}//ねー、
- 377B : 　　　　　　　　　　　　　　　　ありますね
一。{笑い}

(5)と同様に、両者の共同構築的な回答発話が続いている。348I・351I の質問にAが349A・352A で答えると、Bがそれを具体的に補足するようなことを353B で述べ、353B の最後の部分に重ねるようにAが「そうそうそう」と同意している。

次に、356A をきっかけに、話は借りる側としての配慮から、貸す側と借りる側の間で起こり得る問題、あるいは相手側（貸す側）の反応へと移っていく。Aが356A・359A・361A・363A で発話したのに続いて、Bが365B・369B で発話するが、それらはいくつかの点で非常に似ており、Bの発話がAの発話をなぞる形となっている。まず、いずれもが、

携帯の中の何か（メール、画像のフォルダー）を見たということで感情的なトラブルが起きる（信頼関係が薄れそうになる、素で怒る）ということ述べている。また、二人とも、問題の内容を述べてから、気分を害した相手の言動を、「なに勝手に見てんの」みたいになると、（359A）、「やめてよ！」みたいな、（369B）のように直接話法で伝えている。359AでAは、「なに勝手に見てんの」と言いながら誰もいない空間を横目で軽くにらむようにして、誰かがそう言っている様子を実演している。Bも「やめてよ！」のところでは声をやや荒げて、ほかの発話部分とは異なる声音を使っている。そうした実演の後に付けられた「みたい」も、両者の表現パターンの共通性をさらに強調している。

ここでAとBは、必ずしも過去に自分が見聞きした誰かの行動を記憶の限り正確に再現しようとしたわけではなく、ある種の脚色も含めて、自分の話に「写実的な例え」を添えようとしたのであろう。しかし、そこに見られる直接話法や表情、声音による実演は、生き生きとしたイメージを聞き手に具体的に想起させる効果をもっている。Tannen (1989) は、そのようなイメージや詳細の表現によって話し手と聞き手はともに意味の形成・理解 (sensemaking) に参与し、そしてそれが話者間の involvement を高めることにつながる、と指摘している。

続く 370A 以降の部分では、AとBの共感、一体感が言わば最高潮に達する。372A と 373B では、両者の発話の内容のみならずタイミングまでもが一致する。そしてそれだけでなく、重なる「あ、ちょちょちょ」の部分で、両手を前に出して相手から携帯を取り返そうとするような同じ動作をAとBが同時に行っているのである。

この発話の同期は、ここまでのところで両者が共同構築的にチームとなって回答を述べている状況から考えて、二人で第三の参加者（調査者）に向けて何かを述べる共同的ユニゾン（串田 2006）の事例と言える。ただし、361Aの「ねえ」がBに向けた同意要求であり、365Bの発話の最後の部分「いますからね{笑い}」がAに視線を移しながら述べられていること、さらには、回答者が互いに相手の発話に積極的な相づちを返していることなどから、それぞれの回答発話は調査者のみに向けられたものではなく、もう一人の回答者も相手として含めていると思われる。その意味では、会話者が互いに向けて発話する相互的ユニゾン（串田 2006）の要素も同時に含んでいるのではないかと考えられる。

また、372A・373Bでは、発話のユニゾンだけでなく、動作の同期も起こっていることが特徴的である。城・細馬（2007）は、ジェスチャーの同期を用意するのは、「前の会話で行われている、特定の話題に対する経験の披瀝、その経験の有無によるメンバー間のカテゴリー化」（p.89）であると述べている。「携帯を貸す側の反応」について同じようなことを述べているAとBは、類似の経験の共有とその披瀝によって同じカテゴリーに属すると目される。また、上述のように、ここでは少し前の部分から両者が表情や声音による実演を交互に行っていた。その延長として、発話ともタイミングを合わせた身振りによる実演の同期が起こったと考えられる。

同じ動作付きの発話は、さらに 374A と 375B でも相次いでくり返される。これらの言動から、A と B の間では、初めて会った相手と 372A ・ 373B のように発話と動作が同期するほど息が合ったということで、さらに気分が盛り上がったものと見られる。実際、一致を確認し、楽しむように、374A 「「ちょっとだめだよ、そこー、」みたいな、{笑い}のが多い」、375B 「「ちょちょちょ、ちょっと待って」みたいな、{笑い}」と、二人は笑いながら交互に同じ動作つきで発話をくり返し、376A と 377B でも同意要求の「～ねー」を言い合っている。

以上のように、(6)の回答者二人の発話は、調査質問への答え、あるいはその発展として述べられたものだが、互いの発言を聞き、掛け合いを続けるうちに、「二人の間で話が非常に盛り上がった状態」となっている。そこには、Chafe (1985) の言う話者自身の involvement (self-involvement)、相手との involvement、話されていることがらへの involvement の 3 種類がすべて起こり、発話行動を通じて表出されていると考えられる。

4・2 調査者による共感の表出

次に、調査者の行動に見られる共感の表出を検討する。面接調査において、調査者が他者の発話をくり返して共感を表出するのは、上述の(3)のような、回答のおもしろいポイントを味わう「受け」のくり返しの場合が多い。同時に、調査者のこうしたくり返しには、関心を示すことで回答行動を促進するという調査遂行上の方策的な面もあると思われる。

しかし、中には、円滑に調査を運営するための方策の範囲から一歩踏み出た、(6)での回答者 B の表現を借りれば「素で」共感を表明していると思われるような場合もある。以下ではそうした事例を 2 件、見ていくことにする。

(7)は、(5)(6)と同じ調査談話からの抜粋である。ここでの話題は、「言葉の使い分けについて」で、調査者 I が「この相手に、あるいはこの状況で、どのような言葉遣いをしたらいいか迷った、困ったという経験はないか」という質問をしている。それに対して A が、何年ぶりかで会ったおばにどんなモードで話せばいいか迷う、と答えているところである。

(7)

1039A : ちっちゃいときは「なんとかおばちゃん」とか言ってたけど、なんかすっごい久しぶりに、

1040I : //あ、そうね。

1041A : この年になって、会うと、やっぱり一定の大人同士としてちゃんと話したほうがいいのか、

1042I : //んー、

1043A : 昔のノリで「なんとかおばちゃん」って話していいのか、

- 1044I : あ、それはあり//ますね、
- 1045A : どうしよう、と
- 1046I : それは今言われてみると、あ一分かる分かる、私も。{笑い}
- 1047A : ありました、そういうの。久しぶりに何年ぶり、お葬式とかで集合するときに、
- 1048I : はい、はい、
- 1049A : 私のこと覚えてるのかなー//とか、
- 1050B : {笑い}
- 1051A : 「なんとかちゃん、//おっきくなったねー」って、
- 1052B : ありますねー。
- 1053A : 昔の話題じゃないじゃないですか、もう。「どうするの？就職は」とか言われると、
もう昔の、小学校ぐらいのノリでは話せないし、
- 1054I : {笑い}
- ＜中略＞
- 1097I : ふーん、なるほどね。親戚はね、//厄介ですよ//ね。
- 1098B : {笑い}
- 1099A : そうですねー。{笑い}
- 1100I : またこれで自分が、逆の立場になったりすると、親戚のすごいちっちゃい子で、
- 1101A : //あー、
- 1102I : 子ども扱いしてたのがいきなり//{笑いながら}大学生になって久//しぶりに会
ったりしたら、
- 1103B : あー、
- 1104A : あー、
- 1105I : あれかもしれない//ですね。
- 1106A : そうかもしれないですね。いきなり大人//びて、
- 1107B : うーん、
- 1108I : 大人扱いしなきゃいけないの//か、{笑い}
- 1109A : うーん。あー、逆側でも迷、うかもしれないですね。

抜粋前半(1039A～1054I)でのAの回答に対して、Iは1040I「あ、そうね」、1044I「あ、それはありますね」、1046I「それは今言われてみると、あ一分かる分かる、私も」、1048I「はい、はい」と、賛同を込めた応答を返している。それが、調査者からの回答行動に対する単なるエンカレッジメントではなかったことが、それからしばらくしてIがその話題をむし返していることからうかがわれる。＜中略＞の間に、もう一人の回答者Bがいとこへの言葉遣いについて答え、その後、調査者が「久しぶりに会った、子どものころ知っていた人物」の別の例として、小学校の同級生などはどうかと質問し、それは特に気に

ならないとAが答える。そこでIは、同じ質問をBにすることはせずに、1097I「ふーん、なるほどね。親戚はね、厄介ですよ」という発話をしている。これは、(7)の前半での話の要約的なくり返しであり、それによって前の話題を呼び戻す、談話構成的な働き（中田1992）をもつものである。

Iは、「久しぶりに会った親戚」の話題を呼び戻した後、1100I・1102I・1105I・1108Iにおいて、「逆にお婆のほうでも、小さい頃に会ったきりで大学生になった姪と再会したら、やはりどんなふうにしたものか困るだろう」と述べている。これは、Aの回答に対して、立場を逆にして述べるという、視点の裏返しによるくり返しである。Aの話の聞いて、中年女性である調査者が、むしろお婆の立場に近い自分にひきつけて言いたくなったコメントと考えられる。しかもこれは、出現の位置としても、Aの回答にすぐ続く応答としてのコメントではなく、もういったん話がほかに行きかけてから、わざわざくり返しによって話題を戻した上での発話である。したがって、調査の運営上必要な発話というわけでもない。やはり、IがAの話に興味を持ち、触発されて自分が思いついたことをここで述べておきたい、相手に聞いてもらいたい、という思い入れのあらわれと見るべきであろう。

以下の(8)は、調査者Iと回答者C・Dという男性三者による面接調査談話からの抜粋である。携帯電話を紛失した場合についての質問との関連で、Cがいつも携帯を同じところに入れて所在を確認しているという話をしている。

(8)

87C：あの、いつも、この、右のポケットに入れて、そうすればなんか、けっこう僕の携帯大きいんで、こう存在感があるんで、

88I：は一は一は一は一、

89C：あー、ちゃんと入ってるなど、思うんですけど、

90I：うん、

91C：逆になく、なくて、ぼーっとして左側に入れたりすると、あーやば、携帯ないと思つて、

92D：{笑い}

93C：焦ったりはします。

94I：あー、なるほど//ね。

95C：はい。

96I：それは、入れておく場所をいつも決めておくとかっていうのは、よく、いい方法ですよ。僕も、//実はそうなんですけど。

97C：そうですね。

98I：で、そこないと、すごく焦り//ますよね。ドキッとかいう感じで。

99C：{笑い}

87C・89C・91C・93C で、Cが携帯をいつもズボンの右ポケットに入れておくと、たまにうっかり違う場所に入れて、なくしたかと思って焦るという話をする。それに対して、Iは94I「あー、なるほどね」と相づちをうち、96I「それは、入れておく場所をいつも決めておくとかってというのは、よく、いい方法ですよ」とコメントする。ここまでであれば、通常の調査者の受け答えであるが、Iはさらに96Iの後半と98Iで「僕も、実はそうなんですけど。で、そこがないと、すごく焦りますよね。ドキッとかいう感じで」と言って、自分も同じ習慣をもっていること、そしてCと同様、そこになかった時に内心あわてた経験をもつことを告げる。98Iは91C・93Cの内容を自分に置き換えて、「焦ったりはします」を「焦ります」「ドキッとかいう感じ」と、言葉の上でもくり返ししながら述べている。面接調査では、調査者は質問をして回答者から情報を引き出すのが役目であり、質問に答えて情報を提供するの回答者の役割である。しかし、この抜粋では調査者であるIが自らについて語り、情報を出している。これも、Cが日ごろ携帯をどのように管理しているかをIが知って、自分も同じであることをその場で告げ、Cに対する共感を表出することを優先した結果であると考えられる。

5 考察

4節では、回答者間の相互の共感表出と、回答者の発言内容に触発された調査者の共感表出の事例を分析した。これらには、単語や文、表現パターンのなぞりなど、様々なくり返しが豊富に含まれており、共感をもつことで自然にくり返しが行われ、そのくり返しによってまた共感が高まるという様子が観察された。本節では、それらに加えて、語りの重ね合いということに見られる共通性への指向、そして面接調査という文脈における参加の枠組みを通して見た話者行動の意味合いという観点から、考察を行いたい。

串田(2006)は、会話においてある参加者が自分の経験や私事について語ると、聞き手は自身の共通経験を探索し、それを語ったり、あるいは経験の差異を主張したりするが、それらはいずれにおいても互いの「共-成員性」(co-membership)に指向していることを示すとしている。「共-成員性」の概念について、串田(2006)は以下のように述べている。

本書では、会話者たちが担う社会構造的カテゴリーが行為に関連する仕方は、大づかみにするならば2種類だという点に注目する。すなわち、会話者たちは、互いに同じカテゴリーの担い手(これを、「共-成員性」ないし「共通の成員性」と呼ぶ)としてふるまうか、あるいは異なるカテゴリーの担い手としてふるまうか、いずれかである。(pp. 37-38)

共通の経験を探索し、同じカテゴリーの担い手として相手を意識し、そのようにふるまうことは、本稿で言う共感と深い関連をもつ。4節で見た各事例は、言葉のくり返しから少

し視点を変えると、共通した趣旨や内容をもつ語りを重ねる（重ね合わせる）行為ととらえることもできる。4・1で見た回答者二人の活発な掛け合いも、4・2で見た調査者による自発的な発言も、ほかの参加者による語りをきっかけに共通経験を探索し、そこで見出したことを報告すべく、自分自身の語りを重ねた結果にほかならない。

さらに串田（2006）は、共通経験が発見され、最初は一人の参加者が話し手としてその話題について語っていたところに、別の参加者も話し手として参入してくると、単線的であった参加構造が複線的になり、「相互的競合的私事語り」が展開されるとしている。4・1で見た(5)と(6)は、いずれも「相互的競合的」に語りが重ね合わされた形となっている。加えて(6)では、AとBは互いに直前に相手が述べたものよりもある意味で「一歩進めた」発話を行っている。携帯を貸した相手に電話以外のところを見られたことから起こるトラブルとして、Aが「友達の信頼関係が薄れそうになる」と述べるが、それはやや抽象的な表現である。続くBが述べるのは、「素で怒る人がいる」という、より具体的かつ強い感情の描写である。両者がそれぞれ実演している発話例も、Aのにらむ真似を伴う「何勝手に見てんの」よりも、Bの荒げた声での「やめてよ！」のほうが、インパクトでは勝っている。そこで、今度はAが、「あ、ちょちょちょ…」と手振りつきの実演をし、それに重なるようにBも同じことをしている。

このように(5)および(6)には、各種のくり返しに加えて語りの重ね合いを通じた共感の表出が見られる。しかし、一方で面接調査という枠組みに照らして見た場合、これらの行動はどのようにとらえられるのであろうか。

(5)や(6)での回答者たちの発話は、調査質問への回答としての内容的な妥当性に問題はない。ただし、面接調査では限られた時間内で効率的な情報授受が行われることが重要であり、必要以上の冗長さは効率性を低めることになる。その意味では、言葉を変えながらとはいえ同じような内容を何度も言うのでは情報量の点から見ればプラスにならない。回答者二人の共同構築的な回答発話では、重ね合いを通じて情動的価値が少しずつ付加されていたものの、回答としての冗長性においてはボーダーラインであったかもしれない。そのことを二人の回答者がどの程度意識していたかは明らかでないが、盛り上がったやりとりを一定の間そのまま続けていたことにはやはり、両者の共感表出への指向の強さがあらわれていると言える。

次に、4・2における調査者の発話行動を考えてみたい。こちらは、(7)も(8)も、回答者による回答（単線的な構造による語り）の後に、調査者が自身の語りを重ねているものである。そこには、(5)(6)で見たような、活発な発話の応酬や劇的な発話・動作の同期は見られない。しかしながら、面接調査という参加の枠組みと照らし合わせたときには、話し手のひとからならぬ共感のありようが浮かび上がる。

まず(7)では、回答として述べられたことに、調査者が自身の年代の視点からの「ひとひねり」を加え、想定した事例を述べている。これは一見、回答へのコメントの形をとって

おり、その限りでは調査者の行動として特に珍しいことではない。しかし、ここで重要なのは、調査者のその追加的発話が、いったん話のポイントがほかに移ってしまった後で、再び話題を呼び戻して、すなわちその語りをするためのお膳立てをわざわざ整えることまでして、なされているという点である。通常であれば、調査者は質問と回答の連鎖をスムーズに進めていくことを第一義とする。前の話題の中でし忘れた質問をするなどのためではなく、自分のコメントを言うために話題を戻すというのは、調査者の行動としてはやや変則的であり、場合によっては効率的な調査進行という原則に抵触しかねない。それをあえて行っているのは、調査者が先立つ回答に対して自分も共通経験の探索を行い、その結果について述べることで、相手への共感や相互の「共・成員性」への指向を表出することに重点を置いたことのあらわれだと考える。

(8)では、回答に対して調査者は「(携帯を) 入れる場所を決めておくのはいい方法」とコメントしているが、実際にはそれを話のまくら代わりにして、自身も同じようにしていることを述べている。これは、(7)の調査者とはまた別の形で、面接調査の枠組みに照らして興味深い変則的行動となっている。なぜならこれは、4・2の最後でもふれたように、回答者から情報をとるという調査者の役割の原則を踏み出で、自身についての情報を回答者に伝えるという行動だからである。またそれは、面接調査における役割の壁を越えて、ほんの一瞬とはいえ情報提供者という同じ立場で談話に参加するという状況を作り出すということによっても、当該の回答者への共感の表出を実現していると言える。

(7)や(8)で見たような調査者の行動は、調査の枠組みの強さ(構造化面接調査か半構造化面接調査か)や調査者の個性などにもよっても出現の可能性が影響されるものであろう。それらは、上述のように、調査を効率的に進めて情報を採るという調査者の役割からやはずれる行動であるという意味で、(3)の例のような応答的くり返し、すなわち関心や共感の表示によって回答者の緊張をほぐし、円滑な回答を促進するような、調査者行動の一環としてのくり返しとはまた質的に異なるものではないかと考えられる。

6 まとめと今後の課題

本稿では、三者面接調査談話のデータをもとに、回答者どうしが、また調査者が回答者に対して、相手の発話のくり返しや語りの重ね(合い)を通して共感を表出することを見てきた。従来、多くの分析がなされてきた自由会話だけでなく、一定の枠組み内での情報授受である面接調査においても、共感が様々な形で表出されることが確認された。相手や話題に対する共感の表出が人と人との相互行為における一つの基本的な行動であり、どのような目的・形態をもつコミュニケーションにおいても何らかの重要な形で立ち現れ得るということ、ここで見た諸事例は示していると言える。

今回の分析は、人の言葉のくり返しや、話者が人の語りをきっかけに自身の語りを重ね

る行動への着目が基盤になっていたが、同時に、面接調査自体がもつ参加の枠組みに照らすことによって、話者の共感表出への指向性の強さを明らかにすることができた。談話運営の枠組みは、単なる静的なルールとして存在するのではなく、それへの抵触と見えるものを通して、実際に談話で何が起きているのか、参加者が何をしようとしているのかを探ることを可能にする「窓」となる。

ここでは三者面接調査を制度的会話の一つの例として見たが、今後はさらにほかの種類
の制度的会話、例えば教室談話などをデータに加えて、ジャンルとしての談話がもつ目的
と参加者による共感表出行動がどのように絡み合って実現されるか、また両者の間に何ら
かの齟齬が起こる場合には、どのようにその両立や調整が行われているかを明らかにして
いきたいと考えている。

(注1) 文字化に用いた記号は以下のとおりである。

- // その後の部分が次の発話などと重なる
- { } 笑いなどの非言語行動
- ? 上昇音調で発せられたことを示す

【参考文献】

- 木谷直之・熊谷智子 (2007) 「三者面接調査における初対面回答者の参与行動」『社会言語科学
会第 19 回大会発表論文集』 pp.98-101.
- 串田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析 — 「話し手」と「共 - 成員性」をめぐる参加の組
織化—』世界思想社
- 城綾実・細馬宏通 (2007) 「同期現象の組織化 — 共有知識の確認から行為の一致に至るまで—」
『社会言語科学会第 20 回大会発表論文集』 pp.86-89.
- 中田智子 (1992) 「会話の方策としてのくり返し」国立国語研究所『研究報告集 13』 pp.267-302
秀英出版
- Chafe, W. (1985) Linguistic differences produced by differences between speaking and writing. In Olson,
D.R., Torrance, N. & Hildyard, A. (eds.) *Literacy, language and learning: The nature and
consequences of reading and writing*. 105-123. Cambridge: Cambridge University Press
- Tannen, D. (1984) *Conversational style: Analyzing talk among friends*. Norwood, N.J.: Ablex
- Tannen, D. (1989) *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*.
Cambridge: Cambridge University Press

【謝辞】

本稿は、待遇コミュニケーション学会 2008 年春季大会での口頭発表をもとに加筆修正した

ものである。発表の際にフロアから、また本誌の査読者の方々からいただいた貴重なコメントに感謝申し上げます。また、データ収集に御協力くださった皆様にも感謝申し上げます。

【付記】

本稿は、科学研究費補助金（基盤C）「三者面接調査における回答者間相互作用のバリエーションに関する研究」（課題番号 18520346 研究代表者：熊谷智子）の成果の一部である。

（くまがい ともこ 国立国語研究所）

（きたに なおゆき 国際交流基金ジャカルタ日本文化センター）